

過剰な利他的行為の動機が好意感情に及ぼす影響

橋本 捷矢

日本においては、過剰な利他行動は好意的に評価されない場合があることがわかっている。また、規範の逸脱に寛容なアメリカにおいては、日本とは異なり、過剰な利他行動は通常の利他行動と同様に好意的に評価されることがわかっている。一方で、過剰な利他行動の動機に着目した実験は今までに知る限り行われていない。よって本研究においては、過剰な利他行動の動機が利己的か利他的かによって行為者に対する好意感情に差が見られるかを検討した。また、研究 1 では、第三者の社会的用心の程度と動機の交互作用がみられるかを検討し、研究 2 では、動機と好意感情の関係が日米によって異なるのかを検討した。

研究 1 の仮説は、社会的用心の高い（低い）人は、過剰な利他行動に対する好意感情が、利他的動機条件よりも利己的動機条件の方が高く（低く）なる、とした。研究 2 の仮説は、日本では、過剰な利他行動に対する好意感情は、利他的動機の方が利己的動機より高くなるのに対し、アメリカでは、動機の種類によって好意感情の差は見られない、とした。

研究 1, 研究 2 のいずれも、Web 上で集められた実験参加者を対象とする質問紙調査によって行われた。それぞれ倫理審査委員会の承認を得て、2022 年 6 月, 9 月に実施された。研究 1, 2 のいずれも、実験参加者に、「過剰な利他行動を起こした他者がその動機について答える状況」を想定させて、その際の行為者に対する好意感情（親しみ・好意: 2 項目 7 件法）を従属変数とした。想定させる状況では、行為の動機を独立変数として、3 種類（利他的動機・利己的動機・動機なし）設定し、実験参加者にはそのうち 1 種類をランダムに割り当てた。また、研究 1 においては、社会的用心、研究 2 においては、文化的自己観を独立変数として扱った。研究 1 では重回帰分析、研究 2 では階層的重回帰分析を用いて分析をおこなった。

調査の結果、研究 1 の仮説は支持されなかったが、研究 2 の仮説は支持された。研究 1, 2 によって、過剰な利他行動の動機が第三者の好意感情に及ぼす影響の日米差が示された。この結果から、集団主義的文化である日本では、過剰な利他行動に対して、規範的に好ましくない利己的動機よりも利他的動機による行動を好意的に評価するが、個人主義的文化であるアメリカでは、行動の結果のみで判断するため、動機条件にかかわらず行為者を好意的に評価する可能性が示唆された。

今後の研究では、動機条件が正確に操作されているかを確認する項目の追加や、ほかの国での調査を行い、より横断的に検討を行っていくことが望ましい。（社会心理学）